

生徒の気づきを生かして詩を読む授業

鹿児島県鹿児島市立鹿児島玉龍中学校
田中 伊礎子

本校は、今年度開校した中高一貫の中学校であり一年生三クラス百二十名が在籍している。

「読むこと」の授業では、日ごろから生徒それぞれの発想を生かし、考えを交流させることを通して、さまざまな視点から考えることの楽しさを味わい、主体的に読む姿勢を育てたいと考えている。

「ウソ」(『現代の国語1』)という詩は、平易な言葉の中にもさまざまな表現技法が仕組まれ、生徒が親しみをもちながらも、深く思考する活動に適した教材である。自由に考えたことを整理し分析すること、また最後に鑑賞文を書く活動を行うことで、あらためてどのような詩なの、その印象を確認することができると考えた。

〈授業の流れ〉 全三時間

(第一時)

①「ウソ」という言葉からイメージすること

を挙げる。

②ウソとホントを整理する。

③各自、詩を何度もくり返し読み、気づいたこと、疑問に思ったこと、感じたこと、考えたことをワークシートに書く。(箇条書き 20分)

(第二時)

①前時に書いた生徒の気づきや感じたことをプリントにまとめて配布する。(名前も記入する)

②生徒の気づきや感じたことを、構成・表現・内容の三視点から整理する。

③「ややこしい」「混乱してくる」などと感じるのはなぜか、構成の面から理解する。[※]

④表現に関して「リズムがよい」のはなぜか、使われている表現技法をまとめる。また、「カタカナ、ひらがな表記」についてその効果をまとめる。[※]

(第三時)

①作者がもつとも伝えなかったことは、どんな

なことが、第五連を中心にとまとめる。[※]

②気づきを整理して、「ウソ」という詩についての印象やわかったことを素にして百字程度の鑑賞文を書く。

※生徒の気づきを参考にする。

生徒の気づきより(抜粋)

【構成】

・五連構成。最初の四連はウソとホントのことについて書いてあり最後の連は違う内容が書かれている。

・最後の連以外は四行で書かれていた。

【表現】

・リズムがよい。勢いがある。変わっている。
 ・「ホントという鳥」なかがホントでなかがうそやらのなどの表現がおもしろい。
 ・「うそではない」と間を空けているので自分で満足しているような感じがする。
 ・なぜ作者は最後のところだけ「ホントだ」とせず「ウソではない」としたのか。

・嘘を「ウン」とカタカナで書いているので別の意味にも使っていると思った。

【内容】

- ・「水をすくう形に両手のひらをかざね……」は優しい感じがした。
- ・作者は生きていることを実感するためにこの詩を書いたと思う。
- ・息のあたたかさは何かを暗示していると思う。
- ・なぜつなすく必要があるのだろうか。

詩を読み気づいたことを見つける活動の成果と課題

＊生徒の感想より

○成果 □課題

- わかりにくかったけどわかったとき、頭がスッキリした。
- それぞれにいろんな自分が思いつかないことがあるとても面白かった。
- 分析していくにつれてたくさんのがわかっておもしろかった。
- 様々な視点からより一層深められて楽しかった。
- 詩を全体的に眺めていたらふと気づくことがあった。
- 表現・構成などから工夫を見つけ出すのは難しかった。

以上のような感想から、ある程度十分な時



生徒の鑑賞文より

間を確保してひたすら読み続けることにより自分で気づく喜びを感じたり、お互いの気づきを共有することでさまざまな視点から考えたりすることのおもしろさを感じることができたように思う。

一方、なかなか見つけられなかった生徒に対しては、さらに具体的に発見するための手立てを考える必要がある。

○世界に数え切れないほどある言葉。その中からいくつかの「ウン」と「ホント」を取り上げた想像豊かな詩。最初は混乱させられ、最終的に得るものは、真実と確信。「ウン」という詩から、「ホント」が導き出せる。

○ウン・ホントがカタカナで書いてあることで、それ自体がうすつべらくうそっぽい。作者は最後の連で、区別のつかないうすつべらなウンとホントがたくさんある世の中でも、自分の命、存在を忘れてはいけなさと伝えている。

○あえてひらがなやカタカナをたくさん使っているのが、子供から大人まで親しみやすい詩である。ウンとホントのややこしさが、最後には意外なホントが出てきて生きているというところに気づく。

鑑賞文を書く活動の成果と課題

＊生徒の感想より

○成果 □課題

- 読みとったことの中からまとめることができた。
- 自分でまとめるという活動で詩の深いところまでよく分かった。
- 読む人に詩のよさが伝わるように考えて書くのはおもしろかった。
- 感想文と鑑賞文の違いがよくわからなかった。
- 初めて書いたので難しかった。

「書くこと」と「読むこと」を関連させて学習することは、それぞれの能力を高めてくれる。一度、読解した詩をあらためて書くという能動的な活動を行うことで、自分にとってこの詩をどのようにとらえたのが明確になる。

鑑賞文という文種を、初めて書いた生徒も多く感想文になってしまったものも多かったが、あらためてさまざまな種類の文章を書く活動に取り組み書く能力も高めていきたい。

たなか いそこ 鹿児島県中学校研究会国語部会、マルチメディア教育研究会に所属。研究テーマは「メディア・リテラシー」を高める国語の授業」。